

平野国臣歌集

全

911.158

H494h

④

086507-000-7

911.158-H494h

平野国臣歌集

平野 国臣/著

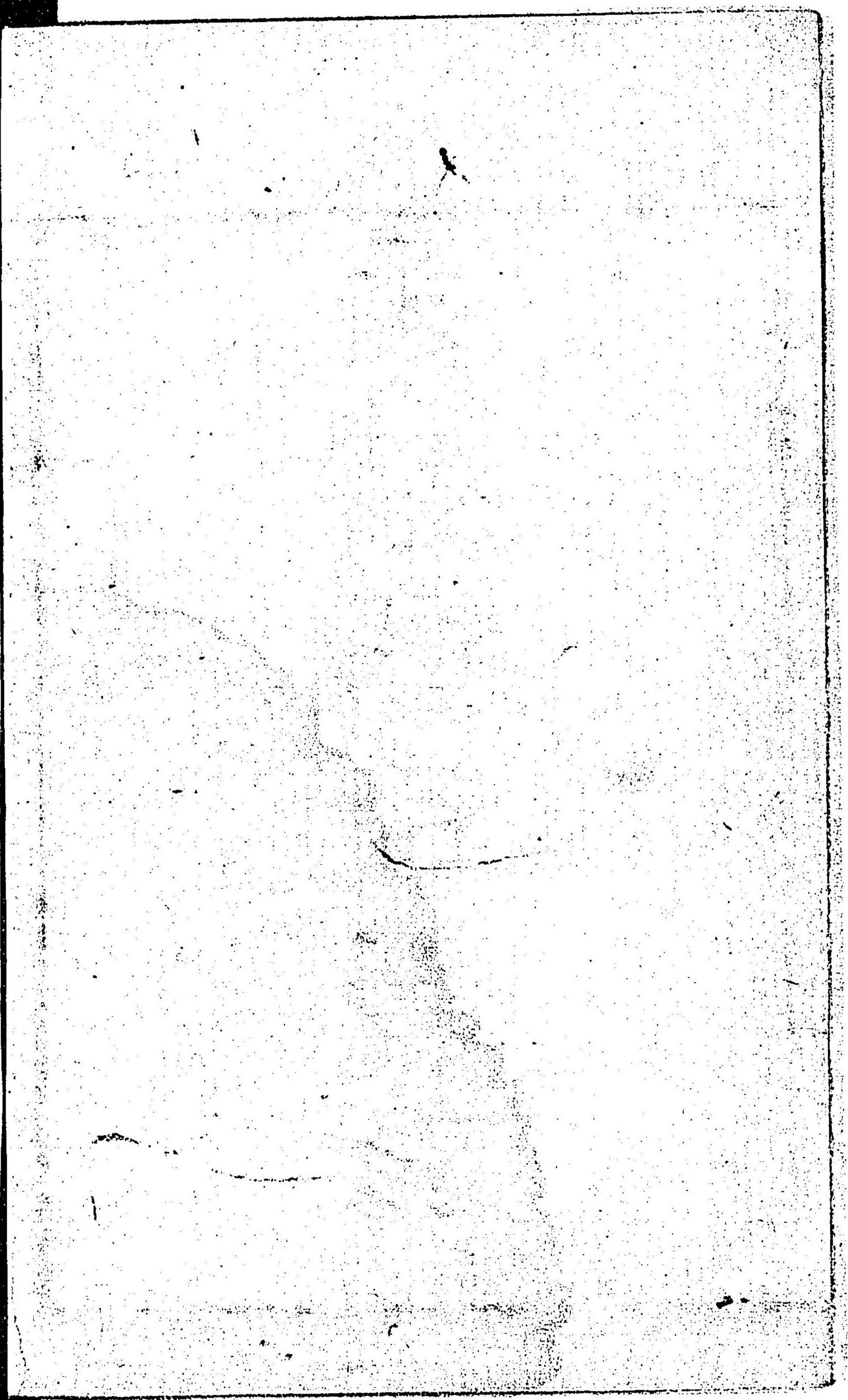
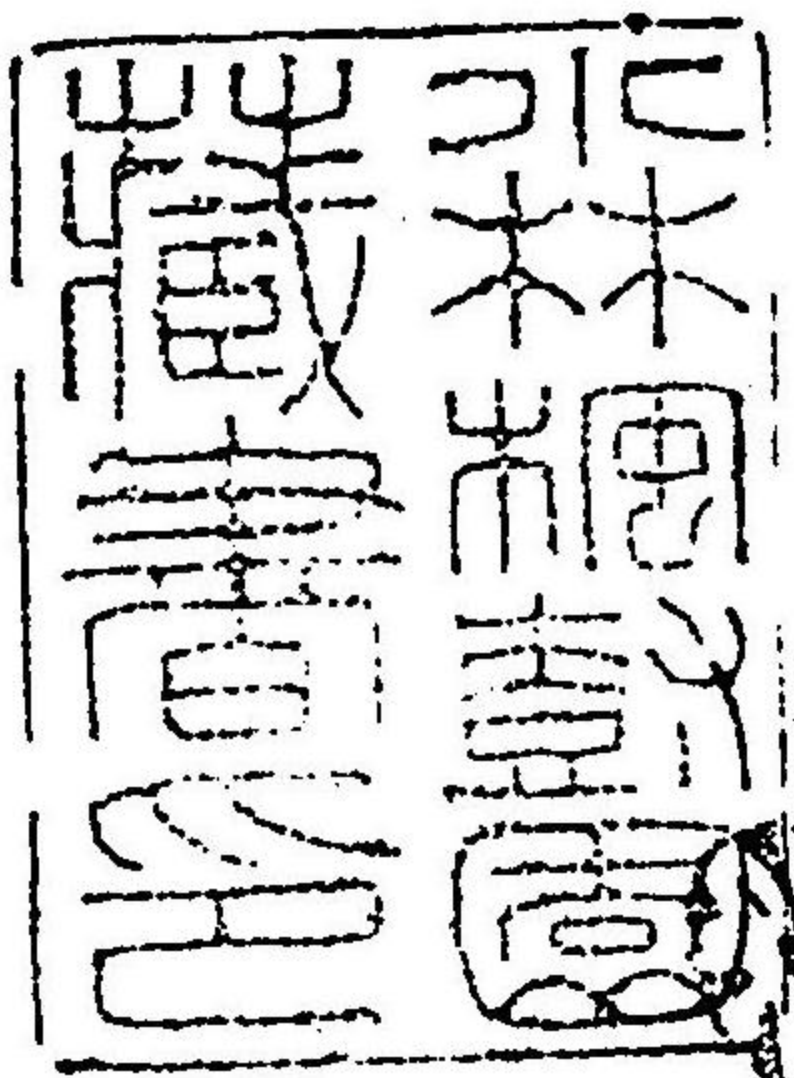
M2

DBD-1363

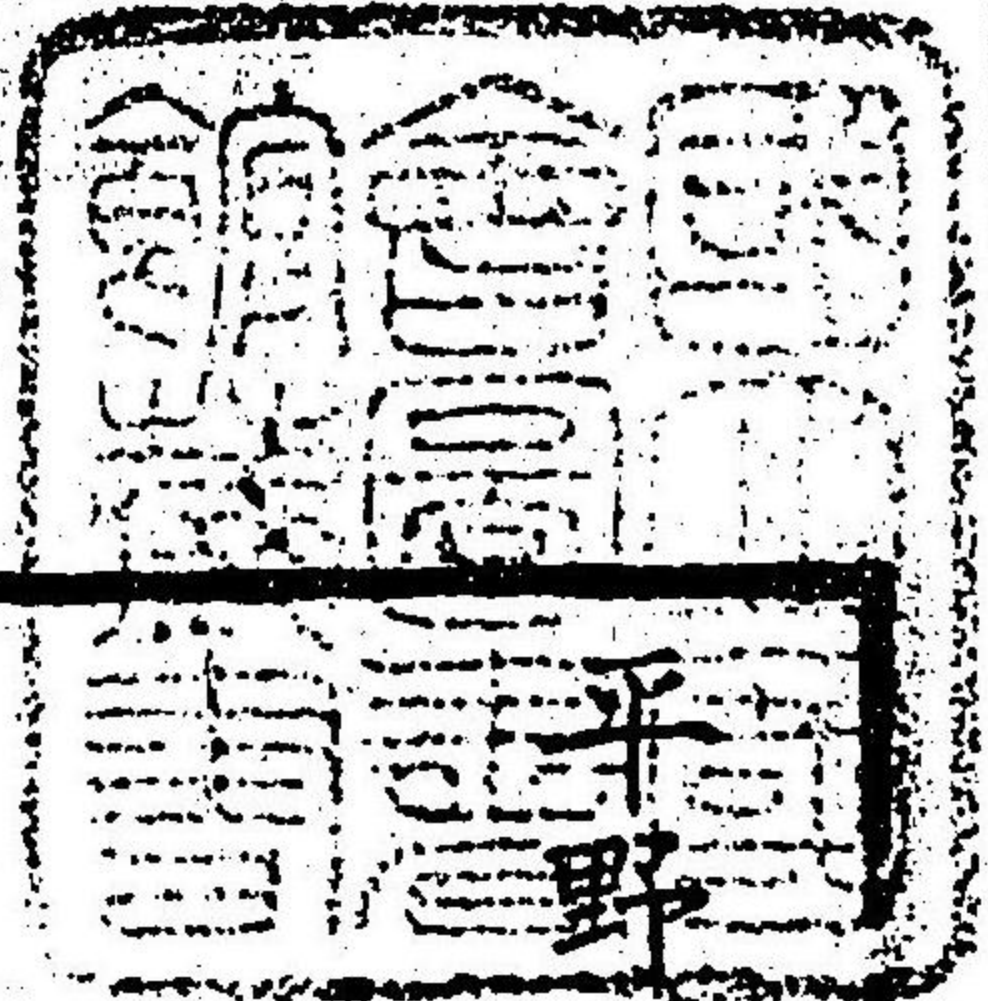




恭  
林  
國  
氏  
續  
歌

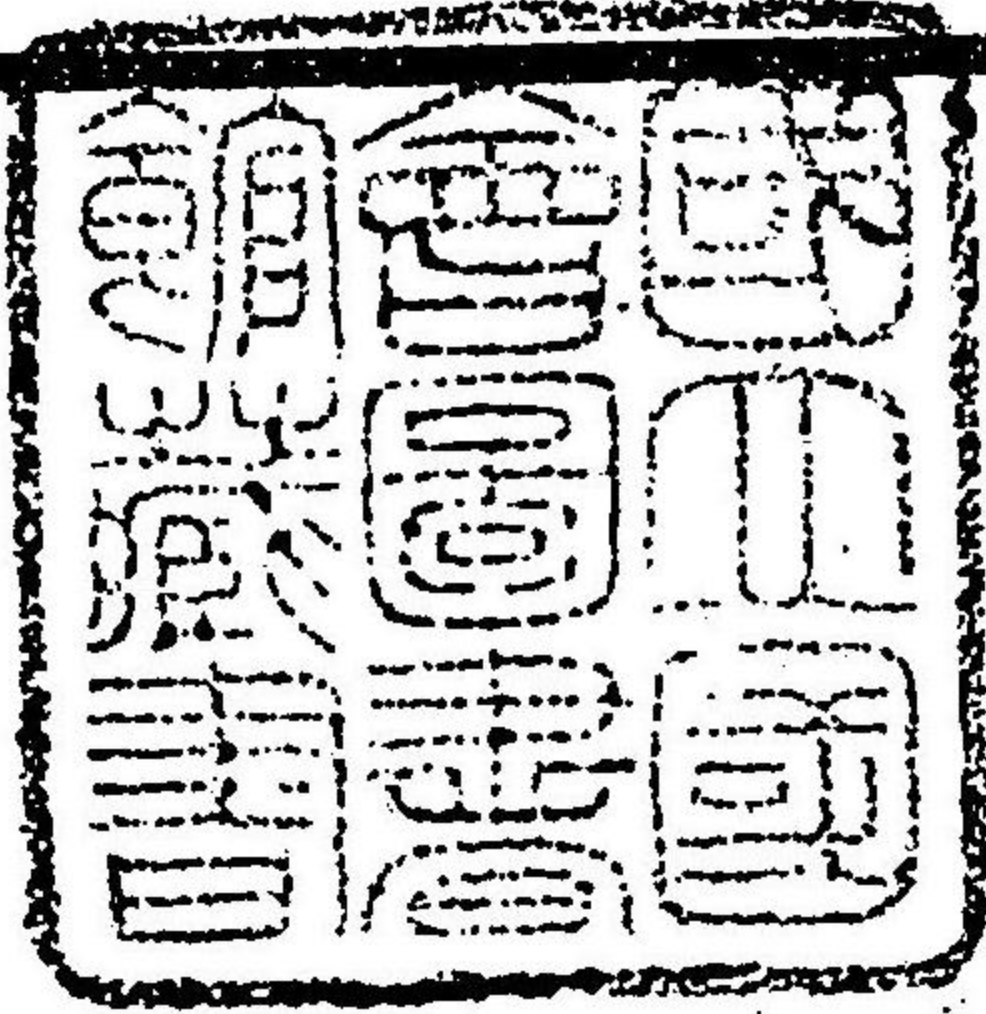


911.158H494 九



野田  
國臣歌集

此集の君りもの一々奉りたる文のあはれ  
 救ふぬ神のまゝ世のいへはあはれ  
 高のいへを命も見るよ  
 後摩の殿よまへてあはれ  
 船あはれあはれとあはれ天皇り  
 清くまはれせ大かた人のまはれ  
 もや人のまはれすの國の名はあはれ  
 早くもまはれせまはれまはれ



112455

島津和泉といふ人、英訳録の「吾  
おくり

春あつて先暎梅乃ひく松乃

まゝちりも春に志多人そし

島津和泉、勅使をいふか

吾妻ふ下りる時

誘ひか、桜島根の暮ゆ

都のさむも白ひそりて

又久幸、西の逢ふ冬、後摩り

行々多時

一筋り、思ふ減のかきまら

後摩の勢き、いづし、法も

諸越乃多のそり、あつ共

そこのると、後摩の関

幸摩人、あつ

天也、春も、あつ

あつ、あつ、あつ、あつ

月照、あつ、後摩より

野馬の園ゆききて今宵落磨燈  
あふくを宿の傍すくく 加那

文文 壬戌の年の正月

朝廷 日もの奉りくらめ

天津地ありや 錦のちる年ふら

靡うぬ州もあふくそ思ふ

くらましくやそみぬう町をむ

あふくたあられ鬼の醜草

伏水去去年死き人を吊りて

中くよ死くも人そいふまじり

生そあふくもあふくそ

伏水こて死くから落磨の人の

墓よ訪て

○ 何さあふく人あふくも山橋

くら多そく危のあふくあふく

大和伊勢 行幸おほきおされ

供まきのくらとくけ給く

○ けくらあふく錦の赤旗あふく

待奉も久しかり

長門よりれり名雲上人の法

あじのみ

吹送る長門の浦乃あはれ

かきわて匂へ九重の

大御旗向もぬ先り横渡の

道あはらうけり拂し

心あき木かて造れ

罷もいさゆもよるのおか

大倉井某之呂宋の追捕

自殺しるを

ささみ共志を

あしよ河を散

船後の水田より所

あめくせき

歩多時

四の緒の

笑てまゆ

倭臣ニ返

世の中より引取りなれども四時無の

いとなきも今たきくあたなき

龍生あまを獄はあつらふ時或人の許よ

とたぐひあきくあよあふあふあ

いこよすむいさめ思ふよあうい

としいあうあう返

おのほかふ啼は替はるもかたなきあ

大々君答の答うけし舞

又「沖の波よきていりくる磯あけや

いき見るくのおあき世の中」とい

いおこせたる返

沖つ風吹ひの浦の浪きみ

いさあ見る身そきさよよあめあ

生野をかふる時

○我命あふん限を以り返すも

於大君のためりはくきん

豊岡よて因屋あつらふときむか

して

白雪よふるとし ちかき雪をふりて

さきさきわらぬまふさきやうり

大内の山道はあまの吹拂い

さよふとらんまふ風はこりぬ

君へのまはれ恵しつとて

かくまはれも ちかや 自らん

姫路を望みし 其の因ふり難

まていとちかきと 和しめられ

くちかきとていらく恨きいひ多時

◎ 赤ら書せし河のりよぬてか大丈夫の

日本魂何 穢多きとて

京よ送られ多時淀川堤よ

この度ハちかきと 身よちかきと

すしよちかきと 淀川風

いふあらん 身のり末ハあま

くふハ都よ 先はきよら

京の獄



○ 芦田豆の翹らうめて菓はあはれと

中しゆきを意ぬればあうまらん利

花瓶に折をきりし山梅

ちりぬけ身の今もみ身のそく

○ 冬もたれし身ハあはれぬれし天地

恥多しハいふあはれぬれし

獄中にて梅を是に安積武貞の送る

清もなり命も是よ君う代の

表の志も——お梅のしる枝

徳方回心おと数多しそ生野のそり

の始末問うそよ答ふる序は梅のそ

そいふ多時よそわ——わらわ

ふあはれそよそわわらわ——人志をん

いそやよあはれ梅はそ一枝

いふそまらそやの内あはれ妙法の

梅の初音を一枝よそそしゆをん

いと——山——くそ俣林光二平

梅の花色をもそわらわそ人乃

春と知さるやづれあつらん  
 田舎の風の便を志すらんそはつらん  
 かどぬやの梅の「こいひおこさるるは」  
 いろ吹風や隣に侍らん  
 いとやの「しら」は「梅か」  
 又梅を乞へば「よきん」  
 さや「き」は「お水」さ「は」花の  
 ちつ「う」春の「す」きを「見」る  
 山梅 是「も」つ「は」も 大内乃

花を「も」思ふ「も」由の「す」  
 如月十六日大和を「奉」  
 今「首」削ら「き」た「は」  
 た「く」い「あ」く「り」り「か」  
 つれ「あ」く「き」を「あ」ら「え」の「山」風  
 吹「お」ら「ん」は「處」の「山」風「の」さ「け」  
 と「あ」木「の」さ「く」ら「ま」る「は」  
 大「丈」夫「の」心「を」た「笑」  
 散「ま」る「甲」方「り」香「々」自「ら」つ

天地の神もあり候と思ふを也  
晴るる空より雨とあふくも  
やうそり道と思ふはしん又  
先立人れあそびかたしん  
いへりよあそび日数を道に式  
都のまのちよんをしん  
村井政礼隣ある河のやうて  
岸よりのいへりあそびかたしん  
さきしんのくもるあそび系柳

身をきかぬ風よりあつてあひらん  
稚義、許へ或人よりいそぎり出  
とつてきかぬあそび稚義よかたしん  
まのちよんをしんあそびかたしん  
あそびあつてあそびかたしんの音信  
穢申作  
あそびかたしんあそびかたしん  
いそぎりあそびかたしん  
まのちよんのあそびかたしん

かのと志きしー天地の神  
 埋もれて月日多あふ深みの  
 底の心をくむ人もおれ  
 深しうみのこころよすおれめ  
 身い深き水のしき深き  
 獄中菩薩をめぐまれらる時  
 心なきつる人の心は花あやめ  
 何のありしき心の色哉  
 さなきめったる深き水の深き

思ひまじあるをあやうの那  
 寂する命の心をめぐまれらる人  
 人まればのそきと折て送る  
 花と獄のおく年いめる命  
 見多きよきまを忘る姫百命の  
 ちぬい獄とまて嘆く人  
 名よめそいなるわがく又のそ哉  
 やきく嘆るいめる命の心  
 身をつみて君の心をわらわ

あつかりつゝ物にありのそ

政礼より返

姫身命の衣あつかりの言の母

君うらの名も是く

たをやめのたてを姿の画のそ

秋山長清、送るはるを是と

忘る手折す何く思ふそ

うつゝおきりもあつかりの姿

春画をくんと

春風より子清をねてつと柳

とけつ乱るるおあつかり

幽霊を画かゝる人の思ふは

鏡もつゝお鬼の姿もそ

おのれもみまもやらの面

獄中より

のたまふ言よりえぬ物も

ゆゑもましまりの一本あつ

ゆゑも出入限りもつゝあ

月日のたつに嬉しううらま  
 有よ郎たふかひる枕をく  
 籠もつるはなまのいづま  
 月花よ人のらおあへおむ  
 一 夫代運つあるよをそある  
 弓を折運太かかくけて来ひ癒  
 いまつきあへん死あに死ぬ  
 数あふぬ・牙ふあれ共物  
 錦一の旗の毛もふ死せん

青春のむらさき極み白雲  
 帝威がやくあぐさ  
 大内のさむを思ふは是れ  
 一 牙のさむさむもの教へ  
 相と遊ぶものちを行ふ  
 軒にひまのうらま  
 一 高きあや雪を志のたて初  
 後進ぬ梅のさむに社  
 政禮ふらやうなる

天降日決光よやそかたきん

君のかりるる波乃ぬきよ衣

返

かきくおるちるのぬきんをきん

月とまらぬかぬきん

國事參政あしりる職

りるるまき今更ぬきん

一重きんをるるちるかきん

むらかりきり小田のたぬき

きんかきんきんきん

きんきんきんきん

九重のゆきんきん

鬼のきんきん

大ゆのゆきん

きんきん

きんきん

きんきん

きんきん

国の之をいふ世ありしとて  
 奥山の昔は高権にらたれり  
 母の心もたれ人の心あり  
 遠代もさるかに物はおもひ  
 つくせんといふ命ありしを  
 題しらん  
 の今更によ我身は思ふこと  
 心よかゝる君が代の心を  
 古御はかゝるかゝるね聞ゆ也

身のけりまにいふある人  
 心もたれいふ世ありし世の中  
 神さつくせん人の心あり  
 生野山もいふ木枯も遠くあり  
 ちりちり世のちりちり  
 の海もや身をたれいふあり  
 いふ心もかゝる世ありし  
 かゝる神もいふ世ありし  
 海もいふ世の世ありし



えみし一草菊して道のかたなり  
 そのくくろまよふ蟹の様を  
 是もよこみ大和男児のたぐ  
 ちかおをよきん四方のえみし  
 えし一草菊して道のかたなり  
 菊よみたるし武をさし  
 ちかおをよきん四方のえみし  
 菊よみたるし武をさし

ちかおをよきん四方のえみし  
 菊よみたるし武をさし  
 ちかおをよきん四方のえみし  
 菊よみたるし武をさし  
 ちかおをよきん四方のえみし  
 菊よみたるし武をさし  
 ちかおをよきん四方のえみし  
 菊よみたるし武をさし

数珠の朽葉かくれよ花穂の

みからしもあまのこゝろありと

ぬも玉の関路をたゞさんせり

身おり末の海もあまのこ

小義山紅葉の色もあまのこ

御筆を絶くあまのこありと

美秋の清華もたゞさんせり

自の都の雪もあまのこあり

玉島に橋綿もあまのこあり

唐紙もあまのこありと

冬枯もあまのこありと

みづの鏡もあまのこあり

夜嵐もあまのこありと

まづもあまのこありと

高きもあまのこありと

着てたもあまのこありと

あまのこありと

人のこありと

平野國臣歌集終

左表のふたのうらもさるるはけりや  
参めててふよは人なりき山奥の奥の  
身の隠家し思ひてきく人  
隱家と思ひかたき位も  
うきものやのまのまのまのまのま  
祈から名も面命 櫻田  
空をよまきしるまのらさ  
大丈夫のほくは誠のたご  
百代のほやし人は志と人

# 官許



明治二己巳季夏新鐫

浪華書林 柏原屋武助

